

我が愛する沖縄の友に贈る

永遠たれ“ 平和の要塞 ”

池田大作

『池田大作全集』四十巻五五八ページ収録

青き空に

情熱の太陽は燃え

珊瑚礁の海は エメラルドに光る

彼方に白銀のしぶきは躍り

岸辺に赤きデイゴの花は微笑む

おお 沖縄！

美しき海の邦よ

白き砂浜を洗う波は静かに

水はどこまでも澄みわたり

陽光は深き海底を照らす

色とりどりの魚の舞いは

夢の竜宮城へと誘うか

海は母――

生物を生み育み

豊かな資源を恵む母

海は道――

遙かなる国々より

文化と友誼を運ぶ道

海は 時に荒れ 時に逆巻くも

静寂の朝には 銀の鏡となり

涼風の夕べには 金の帯を広げ

優しく 強く 大きな腕で

人々の心をつつみ 励ます

あなたたちは言う

その豊かさを称え

「かりゆしの海」と

いつの日も沖縄は

この美しき海とともにあった

私は 沖縄を詩う

私は 沖縄を愛する

私は 沖縄に涙する

そして 私は 沖縄に

民衆の幸の凱歌の潮騒を聞く

かつて琉球王朝栄え

古より薰り高き

固有の文化の花咲く沖縄

人には

おおらかなる海洋人の気風があふれ

気宇は広大にして 勇氣猛く

荒波を越えて

中国 東南アジアの国々に渡り

大交易時代の要衝となる

平和を愛する心強く

義に厚く 情また深く

難破せる異国の友を

救いもてなすこと数を知らず

ああ されど

歴史の濁流は うるま島を襲い

圧政のくびきは始まる

苛酷なる年貢に喘ぎ

嵐 日照りあらば

毒もてるソテツさえ食いて

飢えをしのぐか

星ながれ 時は移れば

あの大戦の惨禍あり

本土防衛の「捨て石」となり

緑の山河は血に染まり

この世に現じた阿鼻の叫喚

戦火に逃げ惑う無辜の民に

「鉄の暴風」は容赦なく吹き荒れ

砲弾は丘を崩し 大地を碎き

火炎は壕にこもれる兵士を 母を

学徒を 乙女を 幼子を焼く

はたまた 集団自決の命さえ下り

ついに 二十万の尊き命を奪う

敗戦の後 また悲しく

米国の統治の下 基地の島となり

各所にミサイルの黒き影あり

あのベトナムへも

ここより爆撃機は飛び立っていった

悲惨なる過去の歴史に

御本仏の御遺命をば心に刻み

ああ 沖縄！

国土の宿命をば転じ

忍従と慟哭の島よ

必ずや 必ずや

そして翌十七日

誰よりも 誰よりも

この天地に この島々に

沖縄に初の支部は生まれた

苦しんだあなたたちこそ

常楽の民衆の都を創らねばならない

この日はまた 遡ること三年前

誰よりも 誰よりも

民衆平和勢力の台頭を

幸せになる権利がある

会長就任から二カ月余

とどめんとする権力の策謀によって

そうなのだ

昭和三十五年盛夏の七月十六日

無実の罪で逮捕された私が

ここに安穩なくして

私は 沖縄の大地を踏んだ

獄舎を出たる忘れ得ぬ日なり

真実の世界の平和はない

時まさに

ああ 縁深き

ここに幸の花咲かずして

宗祖大聖人が

不思議なる 不思議なる沖縄の天地よ

人の世の幸福はない

立正安国論を上呈されし日より

七百年のその日

あの支部結成大会に

那覇なはの商業高校しょうぎょうこうこうに集つい来きたった

一万余いちまんにあまの地涌じゆうの友

日焼ひやくけした顔かほに

誓ちかいの黒くろき瞳ひとみは燃もえ

満面まんめんに笑えみをたたえたあなたたち

私は 叫なんだ

我われらが創価そうがの大使命たいしめいを

私は 深く 深く心こころに期きした

——この沖繩おきなわに自みづからを賭かけんと

この友ともらの

永劫えいごうの幸しあわせと平和へいわのために

地はを這はうも 身みを碎くだくも

断つじて 断つじて

広宣ひろのぶの道みちを拓ひらかんと

おお ここに

新あらたしき歴史れきしの

一いっページは開ひらかれ

輝きらける沖繩おきなわ広布ひろふの

燦さんたる旭あす日は昇あったのだ

この折おり 私は

凄惨せいさんなる歴史れきしの

舞台ぶたいとなつた戦跡せんせきを訪おとずれた

ひめゆりの塔たか——

健児けんじの塔たか——

深く 深く 合掌がっしょうし 祈いのり そして

世界不戦せかいふせんへの誓ちかいを固かめつつ思おもった

いつの日か書かかねばならぬ

小説「人間革命」の筆ふでを

もつとも戦争せんせんの辛酸しんさんをなめた

この沖繩おきなわの地ちで起おこそうと

やがて あなたたちは

悲かなしき過去かこの

運命じゆめいの呪縛じゆばくを断たち切きらんと

懊惱おうのうの洞窟どうくつより出いでて

決然けつぜんと未来みらいの星ほしを仰あがぎ

愛あいする郷土きやうとの建設けんせつに立たち上あがった

高らかに「沖繩健児おきなわけんじの歌」を歌うたった

立正安国の旗を掲げて

偏見の礫をものともせず

微笑と誠実の対話で

旧習の壁を打ち破り

力強く弘教の歩みを開始した

広布のうねり起こりて十カ月

再びの訪問の折

支部は総支部へと

天に昇りゆく飛躍を遂げた

そして歓喜の笑顔の波は島々をつつんだ

その翌年も

私は 沖繩を訪れた

とこしえの栄えのために

盤石なる礎の楔を

岩盤を突き破って

大地深く 打ち貫かんと

この時

平和の基地たる法城が落成

広宣の歯車は

ここを機軸に

轟音を響かせ 回転を始めた

ついに 時は熟し 時は来り

三十九年師走の二日

私は 沖繩本部の一室で

「人間革命」の筆を執った

我が脳裏に去来する

悲惨なる戦争の種々

戦火に散った罪なき民衆の

声なき叫び 無告の号泣

沖繩の 世界の

平和への誓願を込め

たぎり立つ熱情のほとばしりを

熱き 熱き感慨を

ペンに託して私はつづった

戦争ほど 残酷なものはない

戦争ほど 悲惨なものはない……

——それは 沖繩が

あなたたちの悲願が

喚起せしめた

我が生命の叫びなのだ

一人の人間における偉大な人間革命は

一国の宿命の転換をも成し遂げ

さらに全人類の

宿命の転換をも可能にする

その姿を

この天地に現じることこそ

私の そして あなたたちの

この世の使命であり 責務なのだ

人間革命とは

仏の生命と魔性の闘いなれば

勇んで 己に勝ちゆくことだ

そのためにも 私は訴えたい

かけがえのない信仰の日々にあつて

徹して 強気であれ

徹して 勇気をもって

君たちよ

胸に手を当ててみたまえ

きっと 思い当たるはずだ

人間誰しも

敵に負ける前に 己に負ける

弱気の人 臆病の人は

立ちはだかる壁に逡巡する前に

己の影に ひるんでいるのだ

己の幻影に 脅えているのだ

心中の賊に 敗れているのだ

強気の人 勇気の人

常に胸中を制覇しゆくがゆえに

何ものをも 恐れぬ

何ものにも くじけない

何ものにも ひるまない

何があつても

「賢者はよろこび愚者は退く」の

御聖訓のままに

無常の雲間に

燦然たる王者の太陽 我なりと

猛る怒濤に 胸張り進む

ああ 広宣の

瑠璃の思い出を刻みたる友よ

私は忘れない

あなたたちと過ごした

懐かしき金玉のあの日あの時を

大地を焦がす炎熱の太陽の下

車に氷柱を積み

汗にまみれながら

友の激励に走ったあの日

ともに記念のカメラに納まり

一葉の写真に

永遠の誓いをとどめ

勇躍の旅立ちを期したあの時

また 我をたずね来りし国頭の友

桜の枝を差し出せる少女の真心よ

基地の町に

「平和の砦」を築かんとする

コザの友の決意の笑顔よ

石垣はヤドピケの浜で

歓呼の網を引き

ともにハチマキをして

踊った八重山の友よ

亀も舞い出で

万年の栄えの前途を祝うか

激しき嵐を越え 越えて

我を待ちたる宮古の友よ

来りし春の喜びに

平良の市民会館に

広がり起こった歓喜舞

はたまた 青年の君たちと

語り合うこと 幾たびか

皓々たる月光を浴びて

未来を託し 次代を頼み

対話した日もあった

我が腕にいただき 鍛え 育んだ

その尊き労作業は

大学の友と

この大地より

歲月の彼方に埋もれゆかんとする

新世紀の峰を見詰めつつ

真実の民衆の大指導者が
陸続と巣立つを願い 信じるがゆえに

人々の不戦の誓いを蘇らせたのだ

壮大なる人生のロマンに胸躍らせて

また「沖繩戦と

瞳輝き 心清らかに語り合った

そして今 君たちは

ヒロシマ・ナガサキ原爆記録展」は

そうだ

自らの悲哀と感傷を制覇し

戦争の惨禍と惨禍とを結び

全国に先駆け

小我の岩穴にくすぶる憤怒の火を

連帯のネットワークを社会に広げ

高校会の初の結成をみたのも

妙法流布の大歓喜をもって

「沖繩戦の絵」展は

この沖繩の地だ

新しき平和の大道へと開きに拓いた

高齢者から幼き子らまで

青年部反戦出版の第一巻

世代を超えて 多くの人々の心田に

私は青年に期待した

「打ち砕かれしうるま島」は

人類和平の共感の種子を蒔いた

青年に魂魄を注ぎ

君たち沖繩の青年によってつくられ

そして

沖縄市の陸上競技場での

あの感動の平和文化祭

あの日

降り出した雨は

次第に激しさを増し

あなたたちの姿は 煙り 霞むも

瞬時のためらいもなく

演技は続いた

さらに

滝のごときスコールをついて

ぬかるみのフィールドに躍りでた友

莞爾として 広がる歓喜の乱舞

顔を濡らすは

雨滴なるか 涙なるか

おお 踊るは

雨を乞う「クイチャー」の舞いだ

私は詠んだ

「三万の 平和を祈る 雄叫びは

諸天を動かし 銀の雨降る」

豪雨にもたじろがず

いな それさえも

自然の演出と変え

美事なる感動のドラマを演じた

あなたたちの心意気よ

それは 沖縄の心の結実だ

それは 民衆のもてる

強き 逞しき力の象徴だ

ああ いま 恩納村のミサイル基地は

平和創造の研修道場となり

紺青の海より渡り来る風に

緑葉はそよぎ

紅きハイビスカスの花は

平安の微笑を交わし合う

かつて 荒涼たる野に

おぞましき威嚇の砲口を

大陸に向けし発射台は

いま 装いも新たに

平和の記念館となり

その前面には

沖繩の青年の誓願により

「世界平和の碑」が建ち

若人の青春賛歌のブロンズ像が並ぶ

二十万の友 ここを訪れ

平和の光源に触れ

誓い新たに

勇躍の出發を告げる

これまさに

三変土田の原理なるか

そして また

懐かしき石垣島にも

八重山の研修道場は

白亜の偉容を現し

我らが船出を見守り

待ちに待っている

使命深き沖繩の友よ

平和の開拓者たちよ

我らの手で

ここに

永久平和の堅塁の砦を

崩れざる幸の樂園を創りゆこう

友よ

あなたたちよ 君たちよ

知ってくれたまえ

それは 着実なる日々の

精進の持続のなかに築かれゆくことを

あの名高き鍾乳洞の

玉泉洞の景觀を生み出せしもの――

それは

石灰をはらんだ一滴一滴の水だ

わずかなるも

間断なくにじみ出る水滴は

悠久の歲月のなかで

石のつららとなり

石筍を育み

妙境の世界を形づくる

御聖訓に

「火をきるに・やすみぬれば

火をえず」と

一步でもよい 半歩でもよい

今日も 明日も 前へ 前へと進み

何ごとにも くじけず へこたれず

自らの課題を

一つ また一つと仕上げ

己が信念を貫徹しゆくことだ

そこにこそ 広布と人生の最後の勝利の

栄冠が輝くことを忘れまい

さあ 沖縄の友よ

あの澄んだ海のような

清き心と心のスクラムを組もう

嵐にも敢然と抗し

青々と葉を繁らせる

ガジュマルの樹々の強さ――

そのうつそうたる樹冠を

支えているのは

決して一本の幹ではない

幹や枝から垂れた気根が

大地に根を下ろし

幹を守り 寄り集まって

天に広がる緑の大傘を担っているのだ

時に それは

古木を覆い 岩をもいだく

団結の強き力なるか

時代はまさに民衆の世紀

一人一人が主役なればこそ

いや増して

衆知と衆力を連動 結合させる

強き絆が肝要となるのだ

バルチック艦隊発見の打電に

一昼夜にわたりクリ舟を漕ぎ続け

荒海を渡った かの久松五勇士――

それは民衆のもつ力だ 輝く知恵だ

その力が結ばれ

不戦の大波となって寄せ返す時

平和の海原に

生命の世紀の太陽は昇る

沖繩には「守礼の邦」の

床しき伝統あり

まことの礼とは

真心の自ずからなる発露にして

陶冶された人格の所作 自律の力

御聖訓に

「礼儀いささか・

をろかに思うべからず」と

陽光もて 旅人のマントを脱がす

かの太陽のように

守礼の人でなくてはならない

「礼」の力は

また「文化」の力だ

おお――

沖繩の文化の逞しくも巨大な

包容力 そして淘汰力

多くの外来者 征服者さえも

膝を屈せしむる同化力

力によらず 威武によらず

「文」をもって「化」する力

かつて 私は

創価学会の社会的役割 使命をば

暴力 権力 金力など

外からなる“力” に対する

内より発する“精神” の戦い――とした

なれば 沖繩の友よ

文化の力の横溢する君たちこそ

創価の陣列の旗頭だ

創価文化のバイオニアなのだ

おお 沖繩の友よ

太陽の子らよ 大海の勇者たちよ

かつて

首里城の大鐘に

「万国津梁之鐘銘」あり

船を自在に操り 荒波を乗り越え

世界の諸国と交易を結び

文化の橋を架けし

新興黎明の気魄をとどめる

いままた沖繩に

新たなる平和と文化の

「万国津梁」の先駆けの時は来た

戦略 軍略の見地から

「太平洋の要石」と呼ばれ続けた

運命の天地・うるま島は

まばゆい妙の光につつまれて

アジアへ 世界へ

「海のシルクロードの要石」であれ

その旗印も翩翻と

その厳たる平和の旗持ち

いざや悠然と君ら行け

正義のために

波浪も恐るるな

怒濤も恐るるな

正義の航路を一筋に君らゆけ

見よ！

世紀の旭日は昇る

空には虹の微笑の祝福

水面に真白き波の喝采

諸手を挙げて

君たちを照らしゆく

旭日の光彩を浴びて

平和の道を

平和の海へ

君たちよ 胸張り進みゆけ

沖繩よ！

永遠に“平和の要塞”たれ

一九八八年二月十七日

沖繩研修道場にて

沖繩の友の安穩とご多幸を祈りつつ

更には 沖繩の永遠の平和国土たる

ことを祈念しつつ

合掌